

名あらはさんもいか
と、なほ、無名氏とし
て出だしつ。

六 花づくしの歌(春)

石井みづ子

一つとや 一夜降りし春

雨に、咲くや軒端の

糸櫻

二つとや 藤は優美にやま

ぶきは、きよき影添

ふみかは水

三つとや 水にうつろふか

きつぱた、着つ、馴

れにし袖の色

四つとや 夜半の春雨今朝

晴れて、八重紅梅の

花咲きぬ

五つとや いつか盛りに成

りにけり、奈良のみ

やこの八重櫻

六つとや むかしながらの

古郷に、にはふ垣根

の梅の花

七つとや 梨はさびしく海

棠は、おもひありけ

の花の色

八つとや 八つ尾の椿岩つ

とじ、春をいろとる

園のうち

九つとや こころを野邊の

春遊び、菫菜の床や

鈴菜畑

信斯道に巧に、終に一種の禮式作法を創めて、名けて香道といふ。轉法輪三條西家を以て、大宗師と推し、廣く之れを同好の間に玩ぶ。茲に至りて、香道始めて完成全備し、當時の武將侯伯廣く之を賞したるが如し。後宗祇肖伯の徒亦斯の道に巧にして、香道益々天下に流行するに至れり。(織田右府の家士蜂屋某香道の巧者なりしが、命を受けて南都東大寺の蘭奢待を伐り、依て以て今に斯道の宗匠となれり。其裔今尚名古屋に住して斯道を教授せり) 聞香即ち炷香の技は之れを聞香と鬪香とに分つ。共に香木の織片を雲母製薄板上に炷して之れを嗅ぐの法なれども、一は之に由りて、香銘鑑定の優劣を競ひ鬪し、一は單に炷香の薫を嗅ぎて、其趣致を樂むの法なり。

香道に必要な調度 香道に必要な調度は、香爐、火道具、香包、たきから入、盤、銀葉、札、香盆、地敷、料紙、硯、文臺等なり。

香爐 二種あり、一は聞香爐にして、一は火取香爐なり。聞香爐は磁製圓柱形の小香爐にして、三つの足を有し、その足は香爐の底より高く、之れを千鳥形と云ふ。磁製にして象牙製の蓋を有す。(香道具を飾る時は蓋を用ひず) 染附焼、青磁焼あり。火道具 挾、銀製又は黃銅製把子にして、銀葉をはさむものなり。一に銀葉はさみと云ふ。うくひす。香包の紙を刺し置くもの銀製の軸長きもの、押へ。扇子状にして、爐中の灰を押すもの、これ又銀又は銅に金塗せ

十とや 十日廿日と日數經てく、開く園生のふかみ艸く

これは、石井みつ子の刀自が、戯れに、花づくしの鞠歌つくりて、わが手習ひ教ふる、五人の里の少女に傳へんとて物せられたるなり。借しむべし。原文には、四季の花づくしとして、四章ありつるを、いかにせしにか、寫さしめて、わが持てるは、春の都のみなりかし。年月經しほどに

るもの、羽根 細長き羽毛に木柄を付せしもの、香爐に附着せる灰末を洒掃するもの、木香箸 桑若くは唐木製小箸にして香片を挟むもの、さじ 銀葉葉状の小匙にして木製の長柄を有す。香片をすくふもの、以上の諸具を刺し立つるものをたて又は火道具立と云ふ。小さき筆筒の如し。銀又は銅製塗金銀のもの。香包 折据包を用ひ又は香袋を用ふ。折据の包に入五色又は青黄黑白金銀の重ね紙にして、金色のものは尤も表部にあり。蓬萊山又は蝶鳥の類を畫く。折様圖の如し。香袋は織物製圓形の布袋にして、紫色の細紐を以て括るを法とす。たきから入 陶製圓形のもの又は漆器に蒔繪したるもの

散りや失せけん。

刀自は、一種脱俗の人なりき。歌をよくし、又物よく書かれき。されど、餘りに立てたる趣きの強く曲げ難き氣質ある人にて、且つ、極めて、厭世的の性なりければ、ある時、世をはかなみ、人の心の頼み難きを歎きて、遂に西京近き山の奥に挿き籠り、さくやかなる草の庵結ばせて、更に人と交らはれざること三年に及びける程、再

のく内面に金屬を張れるもの。既にたきはてたる香片を入るもの、札 桑又は紫檀黒檀等、唐木類を以て製せる小札にして、諸種の草花樹木等を金粉を以て畫く。盤 長さ凡そ四五寸幅二寸五分、高さ一寸程の桑製小案にして、上に青貝製圓形の小板を有し、銀葉を置くの具とす。銀葉 一に銀盤と稱す。雲母製方形小薄板にして、其上にて香をたく。蓋し、一は火力を調へ、一は香片の燃焼を防ぐ爲なり。香盆 香爐、銀葉入、香包、盤、火道具立、たきから入等を載せ飾る。單に香爐のみを飾るには、四方盆を用ふれ

び、都に出で、見んと

て、

また更ににむりたる
世に出で、見んすみ
飽きたりな山の井の
水

五

孝行鞠歌

と云ふ歌を詠じて、
荒れたる壁に炭のは
し、て書き置きつ
と、また飄然として、
都に出で交らはれけ
るとす。この鞠歌こ
うに掲げんとして、
いさゝか刀自が上を
記し加へつ。

ども、以上の諸具を悉く飾る時は、長盆を用ふるを法とす。或は亂れ箱、文庫のかけこの類を見立用ふることあり。漆器に蒔繪したるもの、又は桑製のもの何れも之を用ふ。

地敷又は疊紙 昔は懷中せる疊紙を用ひしものなるべし。後には、香道にのみ専ら用ふる疊紙をことさらに製せり。内金張外銀にして、金泥にて、花鳥蓬萊等の圖様を畫く。此上に於て香爐を整へ、香片を炷する等、凡ての所作をなす。火取香爐と火箸とを載せて、他の諸調度と共に飾る。
或は之れに代ふるに、大鷹檀紙を折りて用ふることあり。これは、清らかにして氣品高きものなり。

一つとや 人と生れししる
しには、親には孝行
せにやならぬ

二つとや 二人の親よりあ
づかりし、からだを
大事にせにやならぬ

三つとや みとせが間の母
親の、くるしみ給ふ
を思ひ知れ

四つとや よく思へば
親ほどの、大事なも
のは外に無い

五つとや いづくの浦へも
孝行の、人にはみめ
ぐみあるがかし

六つとや むかしくの教
室内遊嬉

文臺、料紙硯、料紙硯は、執筆の銘録并に點數を記すの料にして、文臺は料紙、硯箱を載す。其外、賓客用の組硯あり、之れは客毎に配り置きて、香名を記さしむるの用に供するものなり。

火取香爐 半圓形にして、銀製網状の火屋を附する漆器なり。聞香爐よりは、形稍大にして、炭團を運ぶに用ふ。地敷の上に載せて飾る。

以上を香道調度の大要とす。其他、其の香組の爲に要する所の特別の器具、例之は、競馬香に於ける競馬人形、并に盤芳野龍田香に於ける花、紅葉の形、三徑香に於ける松菊の形の類あれども、くだぐしければ畧す。

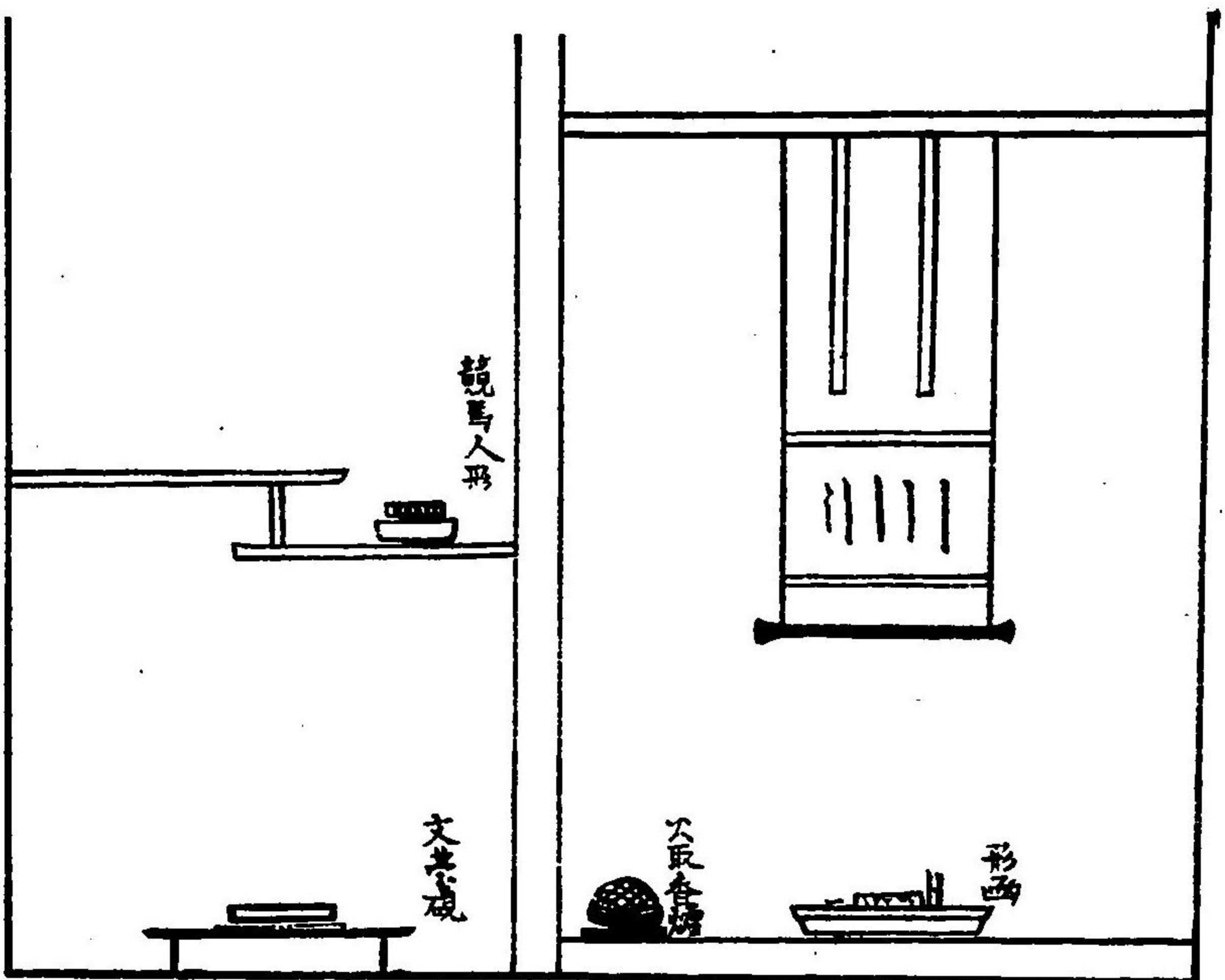
儲右の調度を裝飾するには、會席を假りに書院とすれば、先

へにもく、孝行ばかりは徳のもどく七つとや、何事ようてもふた親に、不孝なもの人ではない、八つとや、やつぱり親をばおもふべし、ひとり大きくなるものか、九つとや、心をよくつけて見よく、ひとり親のかげ、十とや、とほからこの歌覺ねたら、心配させるな親たち、この孝行鞠歌は、わが祖母より教へられたる

は、水戸烈公の作なりと聞き置きつるが、近き頃、ある友の來て見するを見れば、高山彦九郎作として、この孝行鞠歌を寫せるものなりき。而して、字句の二ヶ所異なる所ありしが、大抵みな同様の句のみあり。されば、こは一つものなるべけれど、前述のごとく、一物二人の作者の名を附せり。孰れか眞なるを知らずといへども、鬼あれ、風教には益ある

づ床に書畫幅の時に會へるを展し、花はわざと之を挿むことを避け（これは、香薫を亂すを避るの心しらひ也）中央に長盆又は亂れ箱に香爐二つ、盤、折据、道具立、たきから入、銀葉箱を入れて飾り、席の都合によりて、勝手附の方に地敷の上に火取香爐を載せ、火箸を添へて飾る。床脇違ひ棚の上には組硯を飾り、下に文臺料紙硯箱を飾る。若し、競馬芳野立田香などならんには、花紅葉競馬人形を違ひ棚の上に置くなり。其様圖の如し。

競馬、三徑、五明、七夕、重陽、三景、玄宗、芳野立田等香組は種々あれども所作扱ひは、大抵大同小異にして甚しき變化あるとなし。只要するに、時に會ひて面白く興味ある香銘を附して興じたるに過ぎず。今茲に、三景香の大様を記して、香



遊嬉之乘

べき歌にして、且つ其句調は、今より五十六年、若しくは、七八十年ばかりは昔のものなるべく見ゆ。この鞠歌の中に掲げて、鞠もてあそぶ少女たちが、庭の訓の一助ともなれかしと希ふにこそ。

六 修身鞠歌

- 一つとや 人の妻たる人の子よく、貞といふ字をわするなよく
- 二つとや 二人のしういとしうとめはよく、親とひとつに孝なれやよく

道遊技の一斑を示さん。

三景香

地敷の飾附、前文記載の眞の飾りなり。香三種之を四包宛に分ち、松島、橋立、嚴島と名づく。即ち、橋立四包、松島四包、嚴島四包併せて十二包、外に無銘の香一種を加ふ。之を客と名づく。各包紙の端に小さく香名を記し、捻り匿し置くなり。松島、橋立、嚴島の三種は、其の包の内より、一包づつを別ち取り、之れを試みと名づけ、賓客に聞かせ知らしめ置き、後には、三種九包の外、無名の客香を打交へ匿名にて之を聞かせ、其香名を聞き宛てしむるの法なり。賓客は、五人以上十人内外を最適度とす。餘り客多きは最終の人に至り、香氣の變ずる憂ひあり。

- 三つとや 三つ子のたましひ百までのよく、ことわざ忘るな少女子よく
- 四つとや 嫁入道具は立派でもよく、こころの劣るははよくしやよく
- 五つとや いつも顔つきにこやかによく、物ごしやさしく禮儀あれよく
- 六つとや 胸にくもりのある人はよく、顔にもくもりのあるを知れよく
- 七つとや 何につけても親大事よく、夫大事とつかふべしよく
- 八つとや やとせの頃より

室内遊嬉

少なければ、徒らに手数煩雜にして、行作の順序に趣致少なし。猶骨牌などを二三人にてなすが如し。

諸賓客待合の席に揃はゞ、主人若くは執筆、之を書院に導く。(執筆は、主人客衆の内より指名にて依頼するなり)來賓の上席より、先づ飾附調度の類を靜に一覽して、順序よく席に着く。此時、主人立て長盆を取り、自席に復坐し、更に、火取香爐を取る爲に立つ。此時執筆同じく進みて文臺硯を取り復坐す。主人は、火取香爐を取りて勝手に退き、執筆は再び立ちて組硯を取り、上客の前に置き、一禮して復坐す。上客は最下層の一重を己の前に残り餘を次客に渡す。次客以下凡て斯くの如くして未坐に至り、未坐の客は、最終の一重を主人の料として、之を取り主人の坐側に置く。

こころして、をそこ
女の分ちあれ、
九つとや、心はたがしく身
はきよく、人にはな
さけをかけよかし、
十とや、徳あるをんはみ
めかたち、悪きも立
派に見ゆるなり、
こは、わが祖父東條翁
より、わがいわけ無か
りし頃、これ、常に口
にせんには、自づから、
修身の手引草とも成り
ぬべし。こは、佐久間
象山大人の作りて、親
族の女兒に與へられた

此間に、主人火取香爐の内へ炭團の火を入れ持出づ。始め、火
取香爐を持ち退く時、地敷は携へ退き席に出づる時、又携へ
出づるが故に、香爐は坐側に置き、先づ膝前に地敷を敷く(敷
き方口傳あり)
次に、亂れ箱を少しく坐側に引き寄せ、内より香爐を取り出
し、さて火取香爐中の炭團を取りて、之を聞香爐に移し、火取
香爐は坐の後に假置す。次に立を取り其内の諸道具を取り
て地敷の上に載せ、火箸取りあげて香爐の灰を整ふ。斯くの
如くしたる後、香爐を少し手前へ置き直し、亂れ箱中の盤を
取て地敷の中央に、たさから入を地敷の左側に置く。次に銀
葉箱を取り、内より銀葉を取りて盤上に并べ置く。
斯の如くして、準備全く整ひたる時、先づ香爐の一個を少し

るものなりとて、ある
人の見せたるが有りし
を、一本寫しとらせて
まぬらすとありしなり
けり。祖父は、大人に
交はり在しけるなれ
ば、さることとぞ覺
ゆかし。されど、そが門
弟なども、更に左様の
もの作られしを知らず
と云ふいかあらん。
但し、大人は、なほ、
女調と云ふものを作
られて、これも、親族
の女子に與へられたる
ものなるよし。故品川

手前へ据直し、その火氣の度をはかり、銀葉を其上に載せて、
香包の香を匙もてすくひ取り、銀葉の上に置く(香包は、始め
折据中より取り出だして、地敷の右脇に重ね置くなり)。さて、
主人一嗅して、香氣の如何を試み、香銘を高く呼びて、上客に
香爐を送るなり。例之は、松島又は嚴島など云ふなり。
試の香は、其次の香爐に、前の如く炷きて、香銘を呼びて、上
客に渡す。上客は、二度試み聞きて次客に渡す。次客以下、總て
斯の如くして末坐に至り、末坐より主人に返すなり。主人又
之を試みて、銀葉上の香片を焼から入に投じ、更に次の試み
の香を炷くこと前の如くして、主人先づ之を試み、上客に渡
す。斯の如く三景の試み、悉く終れば、是れよりは、香銘を匿
し、前の如く炷香して、此度は出香とて上客に出す。上客三度

子爵のふりはへおこせ
給ひしがあるを思へば、あるひは、左様の折物せられたりしにもやあらん。

大人が 女訓には、ま
とに、細かき婦人が注
意を周到に載せられた
る、豪邁の名に著き丈
夫が筆ともしも覺わす。
女の身には汗あゆるこ

うちせられつるを、今
茲に掲ぐる所の 修身
鞠歌 も、また、極め
て、女の心しらひ微細
に見て、面白く覺

ゆ。蓋し ハツとやの
條は、今の世には行は
れ難き、いにしへの禮
法をうつしたるなれど
も、形ちこそあれ。心
は左こりあらまほしく
覺ゆれ。年少の女兒が
口にするにはよき鞠歌
の種といふべし。

七 忠の歌

一つとや 湘江 女史
ひとつとや 廣い世界にたい
日本國

二つとや 二つ無き日の久
方にく、いまするがごと

室内遊嬉

之を聞きて次客に渡す。上客は、此時香銘を鑑定して、其思ふ所を、兼て受取り置ける小紙片に記すなり。例之、試の時に聞きし松島とか橋立とか、香氣の酸甘苦辛に由りて之を記すなり。次客以下主人に至る迄、凡て斯の如くするなり。

香の聞様は、先づ右手もて香爐を取り揚げ、之を左掌の上に載せ、右手を爐上に掩ひて香氣の外に漏散するを防ぎ、鼻端に近けて之をきくを法とす。

主人は、香爐の歸り來る時、爐中の香片をたきから入に投じ、香包より香片を取り出し炷くこと、以前の如くして、上客に渡す。上客以下の鑑定記載すること例の如くす。凡そ斯の如くすること一種三包づく併せて九包外に客と稱する未だ試みざる特種的一種を加へて、都合十包の香を聞くなり。

聞香終りたる時、主人は香爐を始め、盤、銀葉、たきから入等の諸具を、亂れ箱の内に納め、地敷は之を疊みて、起ちて火取香爐を勝手へ引く。此間に、執筆は上客以下の札を入れたる折据、香銘を鑑定せる札を入れたるものを取り集め、之を料紙に記録す。或は折据に代るに四方形盆を用ひ、聞香一炷毎に上客より鑑定札を投入して、順次々客以下に廻すとあり。此は時の便宜に従ひて差支なし。此時、上客以下坐を直す。此間に、主人再び出坐して、亂れ箱、火取香爐等を始めの如く飾り直し着坐す。執筆、記録を認め終り、先づ之を一覽し、書損なきや否を檢して後、之を巻き収め、上客に渡し、文臺、硯等を形の如く取形付け、床又は床脇等、便宜の位置に飾りて復坐す。此時主人、次客に一禮して、少し記録を押し載き、坐上に廣げ

きみかぞさきく
 三つとや 御世は長月菊の
 花く、かをりは民の末
 葉までく
 四つとや 世にさかたわて
 萬代のく、末もたねせ
 ぬ五十鈴川く
 五つとや いつもかはらぬ
 天皇のく、まします御
 國を忘るなよく
 六つとや むかしくの昔
 よりく、今もかはらぬ
 高みくらく
 七つとや 何はおきても天
 皇にく、つかふる道を
 たがふなよく

て一覽す。(記録の見様口傳あり)覽終りて、少し坐を次客の方
 に押向け記録を渡す。次客一禮して上客の如く三客に一禮し、
 之を受け、觀覽すると上客の如し。三客四客以下總て斯の如く
 し、衆賓看終りたれば、末坐は之を主人に渡し、主人一覽して
 執筆に渡す。執筆も、亦之を拜見し、再び之を上客に返す。上客
 亦之を廣げ見て、記録中、皆中(悉く香銘を聞き當てたる人を
 云ふ)の人、又は次點の人に渡す。若し主人皆中なれば、次點の
 人に譲りて、記録は次點の客に渡す。記録の渡し様は、主人何
 某様々々と小聲にて連呼して渡す。呼れたる人は上客の前
 に進み出で、一禮して恭しく之を受け、復坐して一禮す。これ
 にて聞香一坐終るが故に、衆客禮して待合席に退き、茶菓等
 を饗し、散會すなり。或は、特に主人に所望して、更に好みの一

八つとや やいかで母とも
 なるならばく、忠義を
 教へよいとし子にく
 九つとや これまで習ひし
 教草く、忠孝仁義を種
 とせよく
 十とや 遠祖よりつたは
 りしく、教へたがふな
 臣の道く
 右は、わが祖母の、彼
 の孝行鞠歌 われに教
 ふとて、忠孝二つは、兩
 輪のごとくと云へば、
 試みに、忠の歌つく
 りて與へんに、孝の歌
 とくもに誦し覺わよか

炷を聞くことあり。然れども、此時は三景五明競馬などの闘
 香をなさずして、始めより香銘を云ひ顯して、一炷のみを聞
 くことなり。記録の認め様左の如し。

記録用の料紙は、檀紙、杉原紙、又は奉書紙等を用ふ。
 三景香記録式

- 一 萩の上風
- 二 初かり
- 三 かたごころ
- 客 千歳の友

三景香之記

一客二二二二二三二二三三三

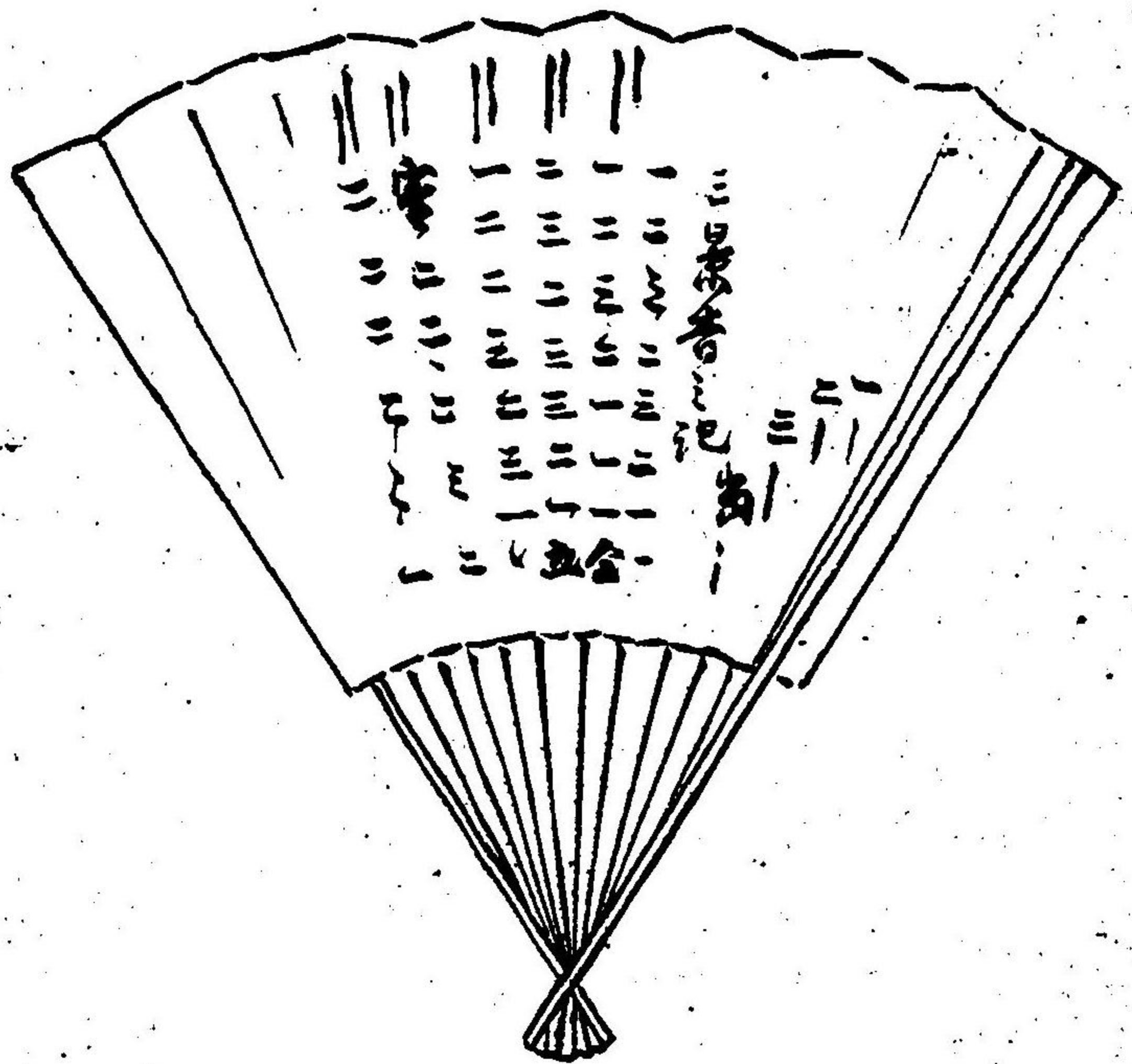
遊嬉之梨

しどて、たまへりしを、
古き匣の底より取り出
だし寫しつるなり。も
とより、維新ごろの折
のことなれば、今と成
りては、いかじやや覺
ゆることもありぬべけ
れど、われらが女友だ
ちの打ち集ひて、誑ひ
遊びつる、ふりわけ髪
のみかし忍ぶ草にも
と、摘みも残さで爰に
記しつ。

八 四季の翰歌
正月 門松 二月初午
三月 御雛様 四月が祭禮

五月が御節句 六月天王
七月七夕 八月八朔 九月
が御鎮守 十月恵比壽講
昨夕 あびす講によぼれて
行つたら 鯛の漬焼 鱸の
吸物 金の御著に 御供符
をつけて 膳さざぐく
先づ 一杯吸ひませう 二
杯吸ひませう 三杯吸ひま
せう 四杯吸ひませう 五
杯吸ひませう 六杯吸ひま
せう 七杯吸ひませう 八
杯吸ひませう 九杯吸ひま
せう 十杯吸ひませう そ
らちようど 一貫貸しまし
ました。

室内遊嬉



尾花	何某	女郎	何某	りん	何某	く	何某	朝	何某	萩	何某	桔	何某	藤	何某
尾花	何某	女郎	何某	りん	何某	く	何某	朝	何某	萩	何某	桔	何某	藤	何某
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客	客
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五

明治卅三年 八月日 出香 何某

一杯吸ひませうと云ふ時、左右の手の甲を吸ひながら、鞠をつくなり。これは、専ら、房總地方にて行はるる鞠歌なり。

○ わらへ歌

わらへ歌は、俚歌の中の、専ら、小供の謠ふものと成りたるを云ふなり。而して、前段にも述べたるがごとく、學校の唱歌盛んに行はるるに、至りしよりこなた、世に云ふ、はやり歌なるものは、殆ど其跡を断つに至り（ことに、小供の歌

或は記録を認むるに、檀紙奉書の類を用ふることなくして、扇子を用ふることあり。一月の會又は夏季の會などには、特に興あるものなり、

聞香雜纂

一 亂れ箱中の火道具立に、火道具を飾るに順序あり。火ばし 匙 はさみ うぐひす 木香箸 羽箒 押 左りまはり に 此の歌によりて記憶するなり。
一 地敷即ち疊紙は、内金外銀に同じ色もて、蓬萊山などの繪様あるものを用ふれども、或は之に代るに色の大鷹紙などを折りて用ふることあり、氣品高きものなり。併し、時に臨みて新しきも用ふるを要す。折様は、大鷹紙を、先づ細長く二つ折にし、更に之を四つ折にして、常の地

敷の如くして用ふべし。

一、火道具も其始めは數も少かりしが、組香世に行はるるに至りしより、五種七種となるに至れり。七種の多きに至りしは、志野宗信の頃より始めれり。若し、古風を用ひば、三つにて足れり。特に懷中する時などは、灰押、香筋火箸にて事足ることなり。

一、東山好の木香箸の寸法今日のものと同じからず、即ち左の如し。

長さ 四寸二分、四方形なり而して、先二分程にきざぎざを付る。

一 香を貯藏するには、錫製の器物、又は壺の類を宜しとす。夏季は冷かなる所に貯藏するなり。古來きやら冷しな

に屬するものは、たまくこれあるは、當局者の、俚歌の中より、其可なるをとり出で、唱歌の中に組み入れられたるもあり。是等は、みな省きて、爰には、さまざまの物體にむかひつゝ、小供が、無邪氣なる口に、おも知れぬことを謠ふなるが、其風教に害無きものを選びて、斯かるものありと云ふことを知らしむる爲めに掲げつ。又、子守歌も一二さるべく思ふものと、害をからんやうのものとを掲げつ。

一月に属するもの
れ月様幾つ、十三七つまだ
年若いな。

同

大事なれ月様雲めがかく
す。とてもかくすなら、金
の屏風であかるくか
せ。

二 風に属するもの

おほさむこさむ。山から小
僧が泣いて来た。ヒュー
〜。

三 雪に属するもの

雪やこんく、散やばら
く、つもれく山のやう
につもれ。ふーじの山のや

うにたーかくつーもれ。

同

雪こんこ、雨こんこ、御
寺の梨の木、雪一杯つー
もつた。つもつた〜、小
僧々々はーけ。はいても
〜、まだ〜たーまつた。

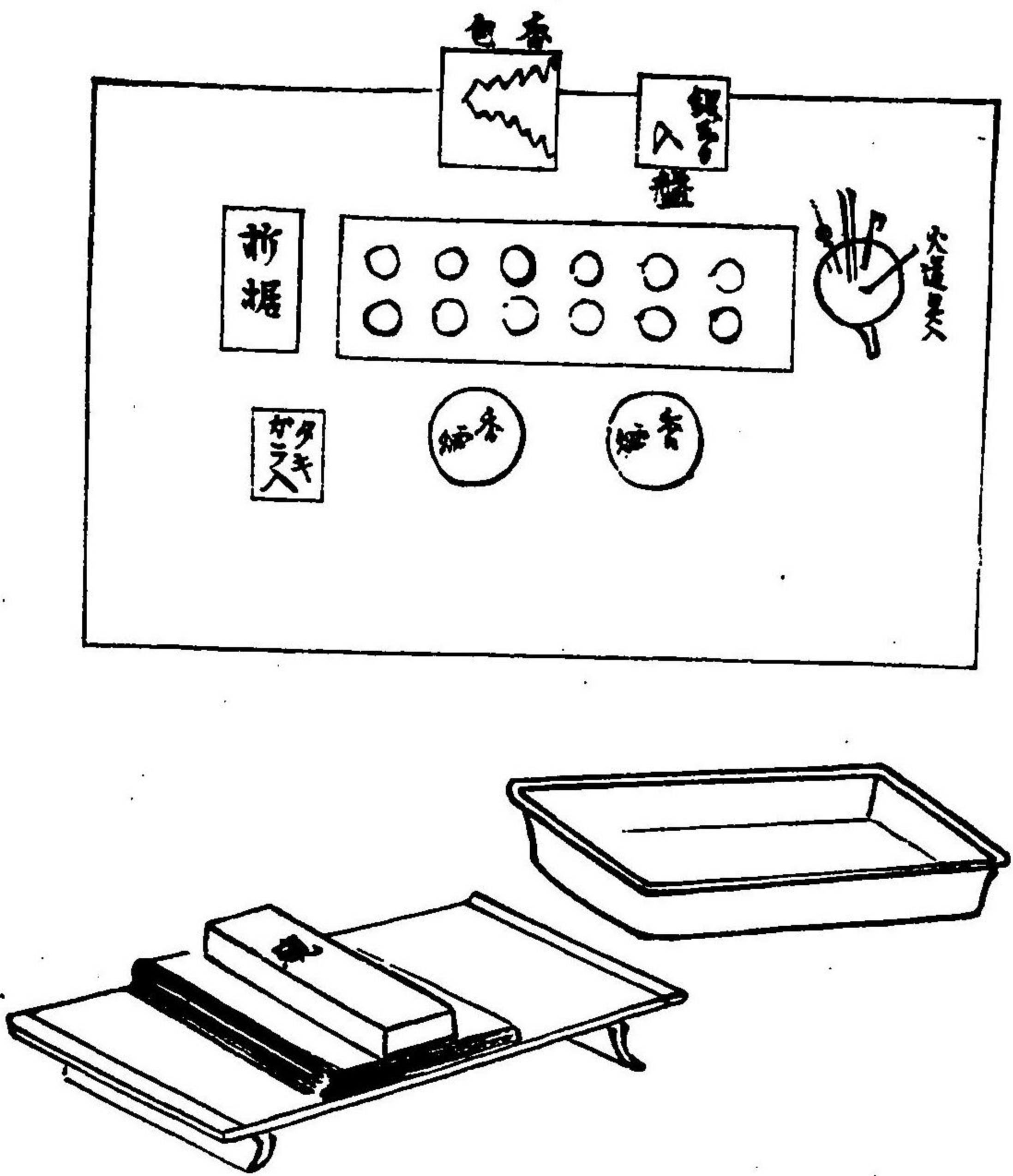
四 七種をはやす時に

七種た〜く、何た〜く、唐
土の鳥が、田舎の土地へ渡
らぬ先に、七種た〜く、何
た〜た〜く。

これは、小供の、七種は
やすやうに、物を打ち
叩きて唱ふる歌なり。

室内遊嬉

亂れ箱并に文飾
臺に文飾



ど用ひしことあり。

一人の前にて香を炷くことあり。銀葉なども無き時は、小
き紙にて、香片を包み、水にて濕し、火爐又は火鉢などの
火氣強からざる所に入るべし。

二、二種香銘の事 むかしより蘭奢待、太子の二種を銘香
六十種の上十一種の第一位に置く。今古上なき妙品最
上の香とせり。之は、品質稀有にして、得がたきの名品な
るが故なり。

一、三徑香の事 三徑香は 一、松と名付三包 二、菊と名付
三包 三、竹と名付三包 以上共に試なし。又東籬と名
付三包 南山と名付三包、右の内三包づくと試に出す。以上
凡て五種なり。之を細説すれば、三種試なく二種試あり。

遊嬉之葉

うの起因は、七種をばやす時に、

七種をすな、唐土の鳥が、日本の土地へ、渡らぬさきに、七種なづなを播き寄せ、とんくく

と云ひつるより、出で来たる、わらべ歌なるべし。

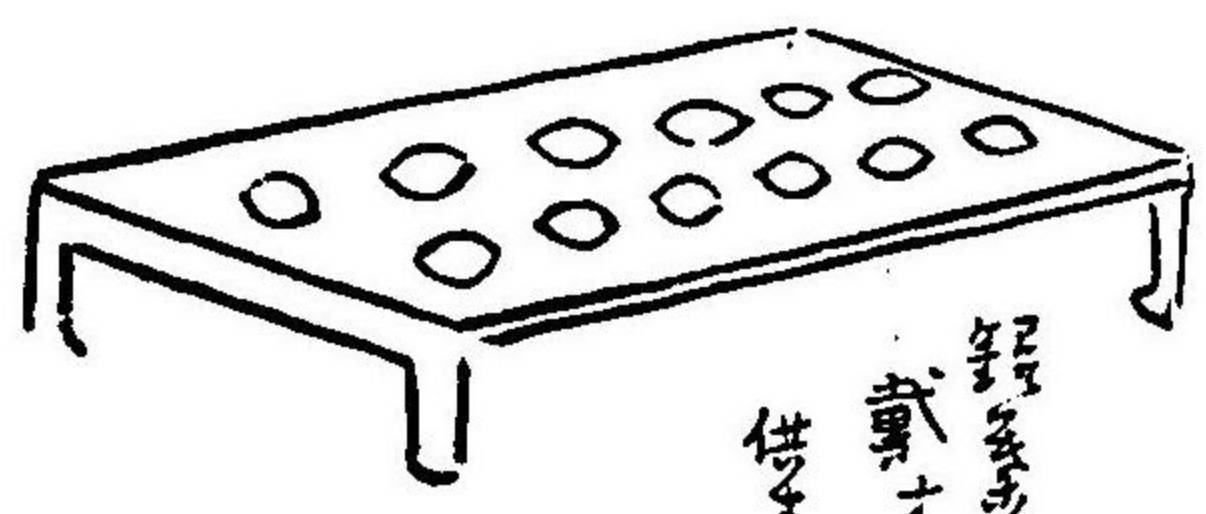
こは、何時の頃にか。鳩と云へる毒鳥の、わが國へ渡り來べし。其鳥の過ぐる所にありし物を飲食すれば、みな、死にいたるべけれど、



火取香炉



火道又立の飾箱



蓋

香箱

試終りて、残り十三包打ちませ、内二包取除き、十一包を、次第に焚出す。二包除くは、松菊猶存の義、其二包除く時、他の同じ香を除きたる時は、一包出香に残すなり。

其前に、七種を調じて食し置けば、この毒に中らずと云ひ傳へしより、この歌は、出で来たるなりと云へり。然るに、維新前後われらが家庭にて、七種はやす時に唱へし歌は、

七種をすな、尊き神のをしへの道よ。國民とみよ。民とみくよ。と云へり。これはやうく、文運の進歩につれて、始めの云ひならはし、餘りにをかしきが故に、何人か作り改めたりけんを、つきくに云ひ傳へたるなるべし。因に記して参考の一つとす。

五 豆まきに屬するもの
福はうちく、鬼は外く、天うち地うち、鬼の目打ちつおせ。

これも、かの、鬼やらひ、即ち、豆まきの時、福はうち、鬼はうちと唱へしより、わらべ歌にもとりて、庭にて、砂などまき散らしながら、かののごとく唱ふるなり。

六 福あがる時唱ふるもの
吹けく大風吹け。あがれく大風あがれ。天の星さまつんぬくまであがれ。

子守歌

風氣く、太陽様ちはやう、西の山、東の山、大風来いく

同

風々あがれ、天竺まであがれ。風吹けねふけ。風尾の尾くれるぞ。

七 齋に属するもの

齋々まひくしよ。明日の日よりに餅くれよ。

同

齋、鳥、魚の鴈あげるから、まーはつて見せーろ。

八 鳥に属するもの

鳥々、足洗つてそこへ行く。榎の木の下へ胡麻まきにー、胡麻幾升まいて来たー。千石萬石まいて来たー、

同

あまの鳥さきに成れ。さきの鳥あまになーれ。

九 鴈に属するもの

鴈々棹になれ。棹になれ鴈々

十 蝙蝠に属するもの

蝙蝠々々此方へ来い。己の棹にとーまれ

同

蝙蝠々々、彼方の棹はうまくない。此方の棹はうまいぞ。

十一 蝸牛に属するもの

蝸牛々々、今日は殿様のねとほりだから、角出して見ーせろ。

同

まひくつぶろ、湯屋に喧嘩があるから角を出せ。

同

まひくつぶろ、まひつぶろ、角出せ。槍出せ。親のかたきだ。負けるな〜。

同

角出せ、めくんじよ、洗湯に喧嘩があるから、角出せめくんじよ。

めくんじよも、やはり、蝸牛のことなり。

十二 螢に属するもの

螢来い。山虫来い。行燈の光をちよいと見て来い。

同

螢来い〜、友見て来い。

同

螢といふ虫、をかしい虫だ。頭にとつきん被つて、お尻のさーきがぴーかぴか。

同

螢来い。玉虫来い。蟻にわたしがさくしんじよ。

十三 蟻に属するもの

つくつくばふしやつくばふし、もじの羽織着て飛んだ。

十四 蛙に属するもの

ふれくあーめ、ふれく蛙。もつと鳴けく。

十五 蚊に属するもの

蚊とんぼく、餅つけく、もつと餅つけ。

十六 芋も虫に属するもの

ねこる芋虫、あこらぬ木虫、ねこるいもむじや友が無い。

同

ねこれく、いーも蟲、ねこつてる中に、蟻は先へ行つてしーまった。

十七 大綿(小虫の名)に属するもの

大綿小綿、綿ばうしかぶつて、誰れの嫁に行ーく。

同

しろつくく、手のなるはうへ、綿もつて飛んで来い。大綿来い、飯くはじよ。飯がいやなら魚くはじよ。

○ 子守歌

子守歌は、能く改良して適當のものを選まば、ことに、家庭教育に裨益多かるべし。爰に今、載する所のものは、従来とて来たれるが中に、風教に害無きもの、及びいさゝか新らしきものを取りて、多少子を育むに益あらしめんとするをもなり。

一 千代の子

赤兒はよい兒じや、千代の子じや。ね千代が育てた赤兒じやものく。

これは普通に唱ふる所のものなるが、ある老翁のことは、己れが幼き頃聞きたるものと異なり。そは、赤兒はよい兒じや、よい赤兒じや。ね福が育てた赤兒じやもの、

と語りたりと覺ゆといはれたるにて、げにと思ひ得たることあり。うは、翁の云はれたることく、「ね福が育てた」と云へりとなるべし、即ち、三代將軍家光公を育て、明君となしめらせし、春日の局の名は、阿福なり。まことに得意ある歌と云ふべし。

二 里のねみや

ねんくやー、ねころりや。ねんねがね守は何處いた。やーまを越けてさーいといた。さーいとのなみやに何もろた、でんく太鼓に笙の笛、ねきやがりこぼしに振つゝみ、もーつと欲しけりやかさぐるま。

子守歌

三 赤い飯

ねん／＼やー、ねんねじよ。あーすは早から、ね目とめや、赤いまんまに魚添へて、たーんとたーんと召しあがれ。

四 乳あがれ

ねんねは善い兒じや、お休みやれ。ちーちが欲しけりや乳あがれ。

五 ちゆうちゆうもねんね

ねん／＼やー、ねん／＼や、ちゆうちゆうも早くねんねした。朝は早から目とめて、ちゆうちゆうと、遊びやれ、ね遊びやれ。

六 ね船で行こか

ねーん／＼ねん／＼や。お船で行こか、ぶつちこ／＼、車で行こかどう／＼、善い兒じや、あでやでねん／＼じや。

これは、もと、車で行こか とある所は、お駕で行こか とありしなるを、近き頃、車で行こか と、ある人の語はせられたる、極めて適當なりかし。即ち、うのかみは、抱き又は負ひなごして、しつかに、赤兒の體を揺り動かしたり、この歌は語ひしなるが、今は、搖籃の中に、兒を寝せしめて、これを語ふは、もつとも其宜しきを覺ゆ。

七 めんもいこ

ねん／＼やー、ねん／＼や。目ん目をつぶつてあやすみやれ。目ん目がさめたらめんもいこ。

めんもいこ とは、表へ往かん之意なり。

すべて、子守歌は、大抵小兒を寝しむる時に唱ふるものにして、うの節、最も眠氣を催すやうに、作りたるものなり。こは、適當なるを選び用ふる時は、小兒の寝を促すに極めてよし。即ち、兒を眠らしめんと欲して、時ならざるに、乳汁をすくむるが如きは甚だ體育上不可なればなり。

家庭唯一の寶鑑

方今女學に關するの書其數少なからずと雖も能く新舊の情理を拆衷して家庭教育の上に適合するもの甚た些少なざるを遺憾とす茲に於て此家庭文庫を出版せり本書は華族女學校學監として學東西を究め遺く歐米に巡遊して一種超凡の新智識と新學見を以て今現に子弟教育の道に従事せらるる下田歌子先生の編述に成るものなれば他の空論談の書と異り上下を通りして一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部十二冊皆是れ編者多年の實験上より出でたる者なれば如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよ

Table with pricing information for '家庭唯一の寶鑑' series. Columns include volume number (一冊 to 全部), price (金卅五錢 to 前金壹圓九拾錢), and tax (郵稅 一冊 錢六). Includes '定價' and '價' sections.

熊田宗次郎君著

明治才媛美譚

全壹冊洋裝紙數六頁美本願
正價金五拾錢 郵稅八錢
○節子妃殿下 ○津輕理喜子嬢 ○田村邦
○稻葉壽子嬢 ○加藤悦子嬢 ○織田邦
○有馬頼子嬢 ○織田常子嬢 ○織田邦
○多和子嬢 ○其他數名

明治才媛美譚

如きは猶ほ百花園の如きもの、艶麗櫻の如きもの、濃麗牡丹の如きもの、嬌紅海棠の如きもの、芳姿芙蓉の如きもの、幽香菊花の如きもの、皆收めて卷の中に在り。然れども本書の取所は、姿色にあらずして、徳操に在り。妙齡の令嬢にして、父に孝なる、兄弟に友なる、朋友に信なる、僕に慈なる、而して才學の卓絶、智識の俊邁なる、婦女の龜鑑たるに足るべきを有し、女子は必ず讀まざる可からず、女子を取らざるは必ず讀まざる可からず、家庭の讀本蓋し之れより善きは無けん。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

家庭文庫 女子遊嬉の栞

定價金參拾五錢

明治三十三年十一月七日印刷
明治三十三年十一月十日發行

著者 下田歌子

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 齋藤章達

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

樞密顧問官男爵細川潤次郎君題字
權掌侍稅所敦子刀自題詠
博文館編輯局編 (第拾壹版)

家政案内

全壹冊洋裝判紙數貳百五拾頁
○大隈伯爵夫人 ○谷子爵夫人 ○西男爵夫人 ○金閣寺 ○銀閣寺 ○西本願寺 ○飛雲寺 ○小石川後樂園 ○岡山後樂園 ○東京近郊の田植 ○其他數葉

正價金貳拾錢 郵稅六錢

國の品格は國民戶々の家政に由り、國民の品格も亦多くは家政に由りて養成せらる、故に心に注意す、本書は日用百科全書中第一重要な編にして、家政整理、一家團樂の樂父母女子の心得、婢使役の心得等何人とも離れ難き心得ざる可らざる簡條を擧げ、丁寧親切に之を説明す、讀者之に由りて汚濁と紊亂なき一家を經營せば、唯國の品格を高くするのみならず、最も健全にして智徳ある子女を得べし。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

華族女學校學監下田歌子女史著 (帝國婦人協會長)

家庭文庫

下田歌子女史學東西を究め一種超凡の新智識と新卓見とを以て現に子弟教育の道に従事せらるる本書各編皆を精實を極む故に他の空論と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部十二冊皆是れ著者が多年の實驗上より出でたるもの如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよと云爾

每月一回發

編五第	編四第	編三第	編二第	編一第
婦女家庭訓	料理手引草	詠歌の葉	女子普通禮式	女子書翰文
此編には其母たるべき人の注意衛生の點より幼児が漸々發育して小學に在る程の事及其器具遊戯の有益なるものをも丁寧懇切に擧げ示さんとするなり	此編は先づ自己が云はんを欲する所のものを意の如く筆に寫し得られたりとを務むべし、本書は此趣旨に依り丁寧懇切に書簡文を説明せられ	下田歌子女史が古今東西の俗書と異なり最も新道に習熟し深き知識を以て其國語を撰たざるべし	我が國の歌は實に女流の手に發育したる者多し不可なき也されど日新の事柄に伴て起る所の感情を詠むの葉も亦日々に新しき現に於ては	夫れ料理と職立とは新に家を持ちたる婦人は勿論學校に之を修めたる人となり其衛生と經濟との注意を主として年若き主婦が参考すべき事

刊和裝上製

編六第	編七第	編八第	編九第	編拾第	編十一第	編十二第
母親の心得	家事要訣	女子手藝要訣	女子普通文典	女子作文の葉	女子遊嬉の葉	泰西婦女家庭
本書は母親の守るべき義務を述べ、其の責務注意より妊期中の心得奇疾の病負傷遊戯具傳傳の者の選定等を親切に述べたり	本書は衣服の取扱ひ洗滌洗濯物の簡易法及び住居の選定構造に就きての注意殊に室内裝飾清潔法等は取らるべきことを示さんとし合せ	之を圖解して詳密なる説明を施し之を習ふべし	治辭難解の文法書は、世其選多しと雖も、以て専門の學生に適すべく最も女子日常の用に適合せる者なり。此書は煩を避けて簡に失せず、	本書は先づ文章は如何にして作るべきものと云ふことを示し、且つ種々の場合に望み、さまざまの題を探りては、斯うやうの材料より成り立ちしむるべきものと云ふことを教へ尙其構造裝飾のしかたに就きて殊更らに心得べき事を掲げたり	本書は専ら女子がものする幾多の遊戯中其體育に將た習育に益多くし古よりの遊嬉の沿革を記し家庭關係の内此有益なる遊戯をなし矯正優雅の性情を養成すべし	其國異なれば風俗又別なり我國外邦に交際する今日又婦女の彼國婦人と交際するの必要尤も多し我が第一に心得べきは彼國家庭の如何を詳かに知るより急なるはなし本書之を詳記せり

定價
 壹册金參拾五錢 ● 參册前金壹圓 ● 六册前金壹圓九拾錢 ● 郵税
 壹册六錢拾貳册前金參圓六拾錢 ● 第拾貳編は豫て女子習字帖
 に豫告し來りしが今回都合に依り泰西婦女家庭に改め習字帖
 は別に壹册として追日出版すべし

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

三浦智之君著

實用家經濟學

附家內心得隨筆

全壹冊洋裝袖珍正價貳拾錢郵稅四錢

發兌元

●一家經濟學の學問上に於ける地位 ●一家經濟學の定義 ●物件と働力の關係 ●一家經濟學上主の地位并夫妻の關係 ●收入 ●收入の種類 ●支出 ●支出の種類 ●收支に關する餘論 ●收支に關する法則 ●豫備金の必要 ●貯金の方法 ●一家の豫算并に收支に關する始期終期 ●收支に關する帳簿 ●土地 ●家屋 ●衣服 ●飲食 ●器具 ●器械 ●廢物利用 ●起業論 ●一家に要する帳簿 ●保險の必用 ●物價豫知論 ●一家經濟上須要の書籍其他の事項 ●一家經濟上家人の守るべき諸徳 ●交際の種類を論ず(別記) ●郵便 ●郵便爲替料 ●電信料 ●電信符號 ●爲替取扱休業日 ●萬國郵便料 ●小包郵便料 ●地租 ●所得稅 ●炊飯の事 ●赤飯の事 ●夢飯の事 ●味噌の製法 ●酒は金の敵なり白樂天の詩 ●烟草は身の敵なり ●傳染病 ●三府に於ける三市の人口 ●五港に於ける人口 ●賢人の遺訓 ●茶の事 ●烟草の事 ●衛生節儉に關する古人の金言 ●五官の事 ●兩便の事 ●人體の温度 ●滋養原質とは何ぞや ●小兒病の種類

博文館

鈴木光次郎君編

明治閨秀美譚

全壹冊袖珍正價金拾貳錢郵稅四錢
 記實新聞 第六卷
 版六
 浸潤膺受の力は實に驚く可きものありて存す。古來哲人傑士の、其母より受くる感化の大なるは、史傳之を示して炳焉たり。婦人は實に社會の潛勢力、賢母良妻の國家に裨補する所誠に溷るの絶鑑たり。

幸福散士澁江保君譯述

生活日々のおきて

全貳冊洋裝壹冊金拾錢郵稅各四錢
 人間の一生は一日にあり、一年を全ふするは一生を全ふするの基なり。本書は此一日を全ふするの法紀律を述べたるものにして、全卷を(一)午前のおきて(二)午後のおきて(三)夜分のおきて(四)平素の掛くべきおきて(五)家族の間のおきて(六)主従の間のおきて(七)朋友の間のおきて(八)喜ばしき時、悲しき時、腹立しき時、心配の時のおきて(九)金銭出納に關するおきて、の九編に分ち毎編皆先哲の言行に照して丁寧親切に説きたり。

内外遊戯全書目次

毎月壹回發行全書拾五冊

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

正價 壹冊金拾貳錢 六冊前金六拾六錢 郵稅壹冊四錢

既刊目次

- 第一編 艇遊 津田素彦君著
- 第二編 射的術 津田素彦君著
- 第三編 クリスケット 津田素彦君著
- 第四編 射的術 津田素彦君著
- 第五編 庭球 野田圭園君著
- 第六編 陸上 志岐守二君著
- 第七編 鳥獸採魚 志岐守二君著
- 第八編 昆蟲採魚 志岐守二君著
- 第九編 室內遊戯 法志岐守二君著
- 第十編 參馬 術滿尾藤次郎君著
- 第十一編 轉引 集安藤謙吉君著
- 第十二編 博車 三井末彦君著

第五版 内外遊戯法

全壹冊洋裝 菊判紙數 三百三拾頁

正價金貳拾錢 郵稅六錢

中學世界記者 上村左川君編
 健全なる精神は健全なる身體に宿る。世の學生たる者將來有爲の素を養はんと欲せば必ず適度の遊戯を行ひ、先づ身體精神の健全を圖るを要す、遊戯の法輕んずべからざるなり、此書は本邦在來の遊戯は勿論、現今泰西諸國にて流行する遊戯法に至る迄汎く之を網羅し、所載の種目無慮貳百フットボール、バスボール、ラウンダース、水泳、劍舞、弓術、銃獵等より理學的文學的遊戯手品等に至る迄、男女少年の内外にて演ずべき遊戯凡て、育智育の上に裨補すべきものは、一として載せざるなし、世の少年請ふ一本を購ふて勤學餘暇の伴侶となさんとを

22517

十一月三日發刊

太陽臨時增刊 世界一周

正價金參拾八錢 郵稅四錢 中村不折君筆

寫真 光澤洋紙二返刷 八面
銅版 風景人物建物其他寫真銅版二
口繪 十四面挿入

本館の乙羽氏に歐米各國を歴遊して歸る、其各地に於て蒐集し來れる寫真繪畫歷然積んで堆を成す今中に就て各國の粹を抜き尤も珍玩とするに足るべきもの最も美麗なる寫真銅版となし、太陽臨時增刊「世界一周」を發行せんとす、十一月三日天長の上等製を以て發行せんとす、用紙は總て船來上等紙を以て發行せんとす、彩色摺とす、而して本文には精巧な版の紙數は平日發行の太陽に倍し、紙は世界の極めたる勝地、奇跡、各種の特色を詳録し、猶諸名家の歐米各處に於ける觀察をも記述し、たゞ此書を播かば眞の價値に世を八錢、天下の至廉と謂ふべし。

幼年世界臨時增刊

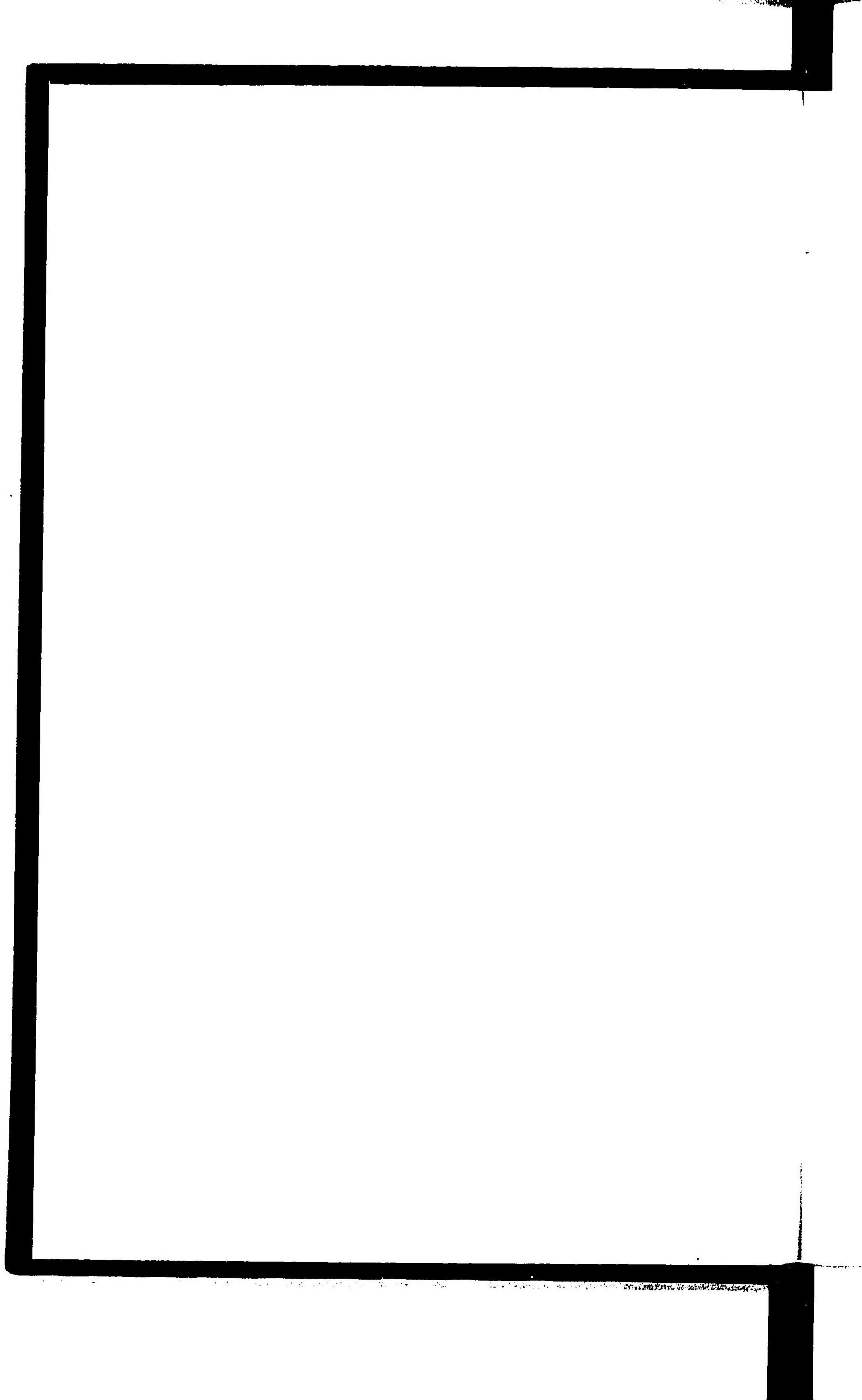
天長節

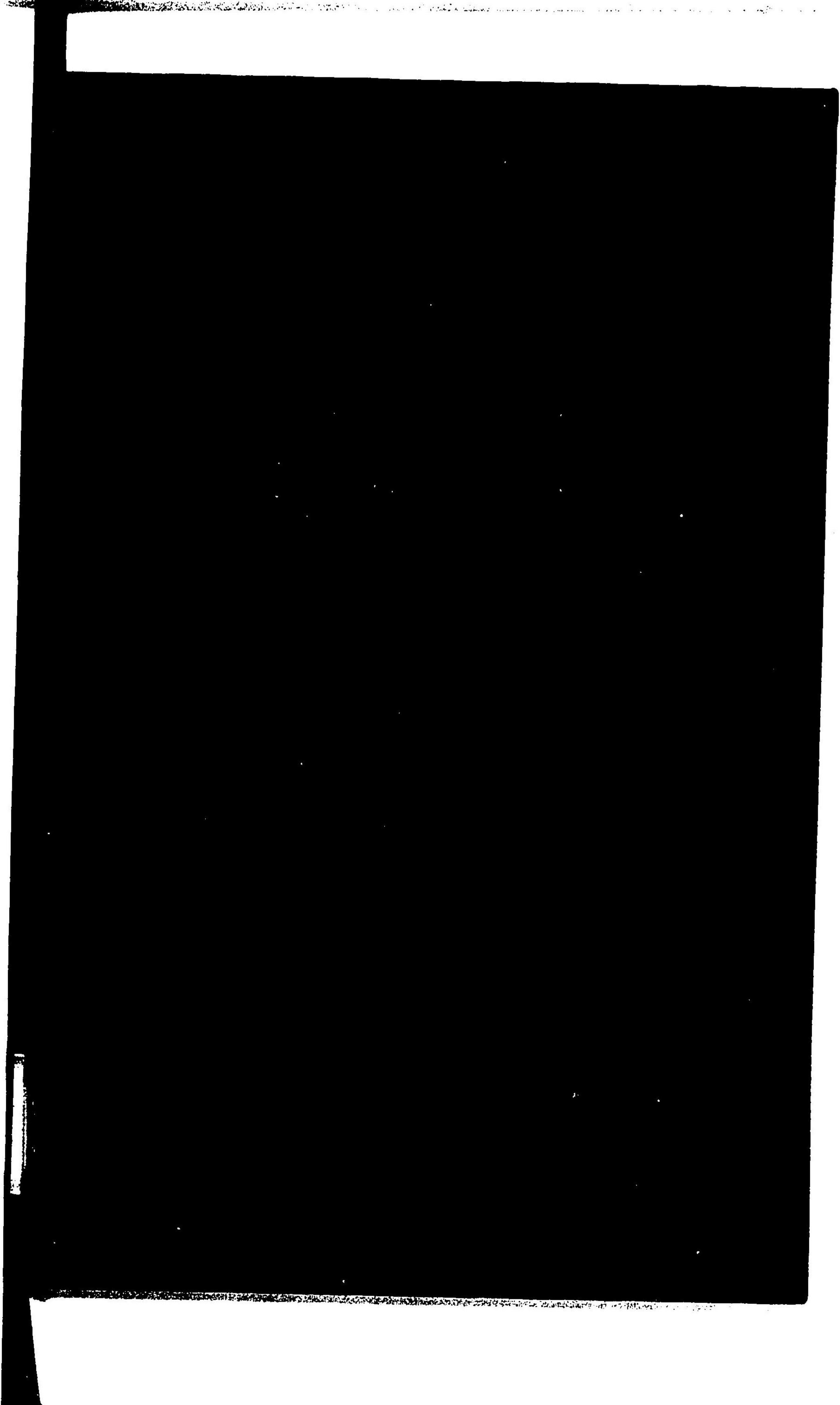
正價金拾錢 郵稅壹錢

寫真 洲島 雌雄の鷺鳥 大と猫 鷓鴣 ●
銅版 土獸 二頭の獵犬 大鷲 小兒と愛犬 ●
口繪 産鏡 枝上の鳩 盛裝の孔雀

幼年諸君唯一の好伴侶として、又好師友として夙に天下唯一との評ある幼年世界は、今や天高く馬肥に燈火親しむべき候、天長節なる名稱を以て盛裝して出づ。八頁の口繪は例に依りて鮮明美麗、以て讀者の目を奪ふべく、記事に於ける石橋思案の新大江山、猪波曉花のねちばや物語、木村小舟の新莊子、武田櫻桃の鉛の兵隊等は近來の傑作、其他記事皆珍奇にて面白き、一度播かば手の舞、足の踏む所を知らざるべし。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館





075429-000-5

77-59

女子遊嬉の葉

下田 歌子/著

M33

CEM-0359



